

もの思う葦

映画文学人生論

太宰治 (1909-48)

『もの思う葦』 (1923) 「世紀」

『碧眼托鉢』 (1926) 「新潮社」

『津軽』 (1944) 「小山書房」

『「井伏鱒二選集」後記』 (1929) 「文芸都市」

私は晩成の芸術というものを否定している

太宰治は『もの思う葦』で『花伝書』を引用して、「私は晩成の芸術というものを否定する」と述べた。「鉄は赤く熱しているうちに打つべきである。花は満開のうちに眺むべきである」。

その『花伝書』には、「三十四五歳、このころの能、さかりにきはめなり」「もし極めずは、四十より能は下がるべし」「さる程に、あがるは三十四五までの比、さがるは四十以来なり」。

能のような芸術にかかわる人には眞の花、時分の花という時期がある。そのさかりを過ぎたら下がるしかないという。歳月は人を待たず。

作家も同じ——正岡子規二十六、尾崎紅葉二十七、斎藤緑雨三十八、国木田独歩三十八、長塚節三十七、芥川龍之介三十六、嘉村礒多三十七——あいつらの死んだとしさ。おれもそろそろと書き残して（『津軽』）太宰治は死んだ。三十八歳。

その二倍近くも長生きをした後期高齢者は、ああ、そうですかと、ため息をつくしかない。おそまきながら、難解な芸術である文学を理解するのに映画を手がかりにしようと思いつき、少しは理解がすすんできたような気がしかけていると、太宰治は追い打ちをかけて、「映画を好む人には弱虫が多い」という。「私にしても、心の弱っている時に、ふらと映画館に吸い込まれる。心の猛っている時には、映画なぞ見向きもしない。時間がおしい」。



もの思う葦

映画文学人生論

なるほど、その通りかもしれないが、同じことは文学にもいえるのではないか。「文学を好む人には弱虫が多い」。

映画と小説とはまるでちがうものだ。太宰はいうが、そのちがいはメクソとハナクソのちがいのようなものではないだろうか。

ただし、「私は外国映画はあまり好まない」という太宰の趣味には私も共鳴する。「会話が、少しもわからず、さりとして、あの映画の隅にちよいちよい出沒する文章を一々読みとる事も至難である、私には、文章をゆっくり調べて読む癖があるので、とても読み切れない」。

実に疲れるという。外国語を勉強して、耳で理解すればよいのだが、一生懸命耳をすませて聴き取ろうとすると、脳みそが疲れる。

千葉県船橋の映画館で『新佐渡情話』という時代劇をみて、ひどく泣いた。翌（あく）る朝、目がさめて、その映画を思いだしたら、嗚咽（おえつ）が出た。黒川弥太郎、酒井米子、花井蘭子などの芝居であった。それにひきかえ、『無法松の一生』は、つまらなかつた。板妻は熱演で、同情したが、しかし、いいとは思えなかつた。映画は芸術であつてはならぬと太宰は言い張る。

しかし、『新佐渡情話』を観ることはもう望めない。『無法松の一生』ならDVDで観れるが。

人間は考える葦である

パスカル